

プラド美術館 — 自分の世界より長く生きた絵

処刑された王の絵が債権者に配られる。宮殿の広間が解体される。耳の聞こえない画家の家から壁画が剥がされる。プラドの十五点が、それぞれ何を生き延びたのかという話です。

表紙: 我が子を食らうサトゥルヌス · 1819 · フランシスコ・ゴヤ · プラド美術館

世界の美術館シリーズ

プラド美術館 — 自分の世界より長く生きた絵

チャールズ一世が処刑されたのち、ロンドン駐在のスペイン大使は二つの指示のもとで動いていました。死んだ王の絵を買うこと、そして誰のために買うのかを決して口にしないこと。こうしてマドリードに届いた作品が、いまのプラド美術館の中核となる部分です。

本書はその収集を七つの章で追い、作品が生きのびてきた部屋をたどります。ティツィアーノとルーベンスで埋め尽くされ、絵のほうが建物を支配していた宮殿。やがてその建物は解体されます。ベラスケスが内側から描きつづけた宮廷。ついには自分の立っている部屋そのものを描きました。王政がほどけていくその時期にゴヤの前に並んだ王家の人びと。そして画家が自宅の壁に描き、のちに漆喰から剥がして運び去られた絵。自然科学のために着工され、絵画館として開いた建物。そして美術館をトラックに積み、国外へ送り出した戦争。

一点ずつ、それぞれが何を生きのびたのかをたどります。

MUSESCOPE エディション

世界の美術館シリーズ · 日本語版
初版 2026年 · 2026年7月29日 改訂
文・調査 MuseScope
作品図版はMuseo Nacional del Prado所蔵およびウィキメディア・コモンズより。詳しいクレジットは巻末に記載しています。

元の記事は MuseScope のウェブサイトで読めます。
読む・聴く・さらに探すなら musescope.app
サポート: support@musescope.app
Instagram: @musescope.app

目次


快楽の園・1490・ヒエロニムス・ボス・プラド美術館



聖家族・1518・ラファエロ・プラド美術館

第一部　処刑された王の絵

1649年1月30日、イングランド王チャールズ1世は、自分の宴会場を通り抜けて自分の処刑台へ向かいました。頭上にあったのは、二十年前に彼自身がルーベンスに注文した天井画です。処刑台は建物の外、二階の窓のすぐ先に組まれていました。すべては三十分ほどで終わりました。

半年後、議会は王の絵を売ることを決めます。収蔵品は千五百点ほど、北ヨーロッパで一人の人間が一生のうちに集めたものとしては最良のものでした。それが小口に分けられ、現金の代わりに王の債権者へ配られていきます。

ロンドン駐在のスペイン大使はアロンソ・デ・カルデナスといいました。フェリペ4世は二つ指示を出します。値打ちのあるものはすべて買え、そして買い主が誰かは何があっても明かすな。マドリードは、死んだ王の遺産処分にひそかに買い付けに行ったのです。



聖家族 · 1518 · ラファエロ · プラド美術館

こうしてラファエロの《聖家族》はイングランドを離れました。

この絵には、後に起きることを予告するものは何もありません。聖母は幼子を膝もとに引き寄せています。幼い洗礼者ヨハネが果実を差し出します。聖アンナが二人の子の上に身をかがめます。手と体と伏せた視線が子どもたちのまわりで閉じ、ほかのすべてを外に締め出しています。

ラファエロがこの場面を描いたのは、ホワイトホールの朝より百三十年前、個人の祈りのためでした。処刑のあと絵は債権者の一人の手に渡り、カルデナスが宰相ドン・ルイス・デ・アロの金でそれを買い取り、アロがフェリペ4世に献上します。

ここから先は、プラドが語りたがり、しかし誰にも裏づけられない話です。ラファエロを目にした王はこう言ったと伝えられます。「これこそ私の絵の真珠だ」。この一言を確かめる手立てはありません。それでも渾名だけは残り、スペイン宮廷はこの絵を《真珠》と呼ぶようになりました。今もそう呼ばれています。

一つの宮廷が崩れて、別の宮廷が豊かになりました。フェリペ4世がラファエロを手に入れられたのは、ロンドンで王の首が落ち、その収蔵品が誰かの「まとまり」であることをやめたからです。

大きなコレクションはたいていこうして育ちました。絵は結婚、相続、外交上の贈与、売買、そして国家の破局を通って持ち主を変えます。一枚の絵は、持ち主より、宮殿より、国より長く生き延びることができました。



アンドロス島の酒宴 · 1523 · ティツィアーノ · プラド美術館

もう一枚は、もっと静かな破壊のあとフェリペ4世のもとへ来ました。その絵のために作られた部屋を、誰かが解体したのです。

ティツィアーノは《アンドロス島の酒宴》を、フェラーラのアルフォンソ1世・デステの雪花石膏の小部屋のために描きました。画面は人と葡萄酒と動きでいっぱいです。飲み、踊り、眠り、たがいに身を寄せています。手前では裸の女が片腕を頭の後ろへ投げ出して眠っています。右下の隅では、男の子が衣をまくり上げて草に小便をしています。

そして一番下、宴の人々の足もとに楽譜が一枚落ちていて、その音符は読めます。アドリアン・ヴィラールトのカノンで、歌詞はフランス語です。飲んで、また飲まぬ者は、飲むということを知らない。ティツィアーノは酒の歌を絵の中に描き込みました。今でも歌えます。

アルフォンソの小部屋は、名画を並べる大広間ではありません。狭い私室で、そこでは何枚もの神話画がいっしょに働いていました。主題も色も律動も、壁から壁へ続いていきます。客はそこへ入ると、一枚の絵の前に立つのではなく、ひとつの全体の中に入りました。

1598年、フェラーラは教皇領となり、枢機卿ピエトロ・アルドブランディーニが小部屋の絵をローマへ持ち去ります。それから四十年後、《酒宴》はマドリードに着きました。

画布は残りました。部屋は残りませんでした。

文書と、同じ組で伝わった絵から、研究者はどれがどこに掛かっていたかを組み立て直せます。最初の観客も、あの宮廷の作法も、初めてあの扉をくぐった人が感じたものも、誰にも戻せません。

二枚の絵は王室の収蔵品に入りました。二世紀後、そこからプラドが生まれます。一枚は倒れた王朝から、もう一枚は解体された部屋から来ました。フェリペ4世は自分の宮殿を別のやり方で整えます。そこに置く絵は注文して描かせ、そして絵は装飾以上の仕事をしました。

第二部　絵が宮殿を治めていたころ

1630年代、マドリードのブエン・レティーロ宮に「諸王国の間」という広間ができます。戦闘画が勝利をたたえました。騎馬肖像は王家の人々を将帥として示しました。ヘラクレスが何枚もの画面に現れ、この王朝を古い力に結びつけました。

訪れた者は、一枚ずつ吟味する必要がありませんでした。一方の壁からは勝利が、もう一方からは王権が迎え、王朝の未来という約束が居あわせる者たちの頭上に広がります。絵はどれか一枚が単独で有名になるずっと前から、まとまって働いていたのです。

ブレダの開城 · 1635 · ディエゴ・ベラスケス · プラド美術館





王子バルタサール・カルロスの騎馬像・1634・ディエゴ・ベラスケス・プラド美術館

ベラスケスの《ブレダの開城》もこの企画の一部でした。中央で、オランダ側の指揮官ナッサウのユスティヌスが、スペインの将軍アンブロジオ・スピノラに市の鍵を差し出します。スピノラは相手の腕をつかみ、膝をつかせません。

スペイン兵の背後には、垂直の槍が柵のように立ち並んでいます。間隔は均等で、密で、画面の上辺から外へ抜けていきます。左の敗者側にはそれに当たるものがありません。ばらけた集まり、うつむいた頭、秩序らしいものは見えません。この絵のスペイン人はオランダ人より強いわけではなく、より組織されている。ベラスケスはそれを、木の柄の並びだけで語りました。スペインではそのせいで、この絵は《槍》という別名で呼ばれます。

ベラスケスはブレダにいませんでした。彼が描いた身ぶりは、ほぼ確実に起こっていません。

広間のほかの絵は、この凱旋を単純にはさせませんでした。フアン・バウティスタ・マイーノがバイーア奪回を描いた画面では、負傷者と苦しむ人々が軍事的成功のすぐ隣、手前に置かれています。帝国はマドリードでたたえられ、戦いは大洋の向こうで行われ、宮廷はその戦争を見世物のように眺めていました。

広間は未来についても語りました。《王子バルタサール・カルロスの騎馬像》では、子どもが棹立ちの馬を御し、その下に広い風景が開けます。統治できる年齢になるより何年も前から、彼は号令する用意ができているように見えます。



ブレダの開城 · 1635 · ディエゴ・ベラスケス · プラド美術館

バルタサール・カルロスは1646年、十六歳で亡くなりました。王位には届かず、肖像だけが、来なかった未来を示し続けました。

政治の劇場としての「諸王国の間」は、注文主より長くは生きませんでした。絵は壁から下ろされ、別々の場所へ散り、たがいの結びつきは切れます。近くで見れば《ブレダの開城》はかえって読みやすい。身ぶりも、二つの隊形も見えます。ただ、見る人のまわりにもう、この広間の論旨を支えていた他の勝利も英雄も王家の肖像もありません。

美術館には絵があります。広間のほうは、頭の中で組み立て直すしかありません。

ベラスケスはこの世界を内側から知っていました。王の画家であると同時に宮廷の役人でもあり、そこでは家格と役職がすべてを決めていました。あるとき彼はその機構全体を、自分も入れて描きました。



第三部　宮廷の内側のベラスケス

《ラス・メニーナス》の中央に、淡い色の服の少女が立っています。マルガリータ王女です。二人の女官が彼女のほうへ身をかがめます。手前には小人の女性、もう一人の侍従、そして眠そうな大きな犬。奥の開いた扉には、宮廷の配室係が段の上で足を止めています。左手ではベラスケスが背の高い画布の前に立ち、画面の外の、こちらを見ています。

奥の壁には鏡があり、フェリペ4世とマリアナ王妃が映っています。二人は、私たちが立っているように見える場所にいるのかもしれません。あるいは鏡は、ベラスケスが描いている画布を映しているのかもしれません。絵はどちらとも言いません。

ベラスケスの胸には、サンティアゴ騎士団の赤い十字があります。長年追い求めた貴族の印で、手にしたのは1659年、この絵を仕上げてから三年後のことでした。十字は完成した画面の上に、しかも彼の死後に加えられています。伝説では、筆を取ったのはフェリペ4世自身だとされます。証拠は何もなく、まず間違いなく作り話です。それでも話がうまくできすぎていて、誰も消させませんでした。

次に、王女の左の頬を見てください。

1734年のクリスマスの夜、マドリードのアルカサルが燃えました。火は四日続き、宮殿は焼け落ち、王室収蔵の絵が数百点ともに失われました。《ラス・メニーナス》は運び出されました。焦げた画布の縁は切り落とすほかなく、熱で絵具が浮いた箇所もあり、宮廷画家フアン・ガルシア・デ・ミランダが王女の頬を描き直します。私たちは三百年近くその頬を見ていて、何も気づいていません。

この絵は宮殿だけでなく、宮廷そのものより長く生きました。この場面がひと目で読めた世界はスペイン・ハプスブルク家とともに終わり、部屋にいる人々は同僚から歴史上の人物に変わって、その役職はいまや説明を要します。

目は王女に引かれますが、国王と王妃は映像としてしか現れません。ベラスケスは私たちのすぐ前に立ちながら、画布はこちらに背を向けていて、そこに何があるのかは永久に分かりません。奥の扉は宮殿のさらに内側へ続き、段の上の男は入ろうとしているのかもしれず、出ようとしているのかもしれません。

こうした隙間から、小さな図書館ができました。《ラス・メニーナス》は、絵画についての主張として、画家の地位についての主張として、王の臨在についての主張として、そして見るという行為そのものについての主張として読まれてきました。どの読みも議論を終わらせていません。

この絵が公共の美術館に入ると、かつてなら宮殿の門も通れなかった人々がその前に立つようになりました。スペインで最も閉ざされていた部屋が、誰でも入れる場所になったのです。

ベラスケスが描いた宮廷は、まだ揺るがないように見えました。ゴヤが受け取ったのは別の宮廷です。

第四部　ゴヤは宮廷が崩れるのを見る

1800年、ゴヤは《カルロス4世の家族》を描きます。絹と勲章とダイヤモンドをまとった十三人が彼の前に並びました。王妃マリア・ルイサがほぼ中央、その隣にカルロス4世。ゴヤ自身は奥の暗がりで大きな画布に向かっています。ちょうど一世紀半前にベラスケスが自分を置いたのと同じ位置です。

この絵はふつう、ひそかな嘲りとして説明されます。五十年後、テオフィル・ゴーティエは、国王夫妻はまるで宝くじに当たった街角のパン屋とその妻のようだと書き、その一句は以後くり返されてきました。誘惑は分かります。ゴヤは誰も美しく整えていません。ただし、彼が戯画を意図したという証拠はなく、注文は公式のもので、王も満足しました。ゴヤが描いたのは、重い織物、赤らんだ顔、厚みのある体、そして親族どうしのぎこちない距離です。

カルロス4世の家族 · 1800 · フランシスコ・ゴヤ · プラド美術館





裸のマハ · 1800 · フランシスコ・ゴヤ · プラド美術館

ほぼ同じころ、彼は衣服をまとわずクッションに横たわり、見る者をまっすぐ見返す女性を描きました。

《裸のマハ》は、スペインで最も力のあった男マヌエル・ゴドイの私室に、着衣の対作品と並べて掛かっていました。彼女が誰なのかは分かっていません。噂はほとんど即座にアルバ公爵夫人の名を挙げましたが、まともな根拠はありません。この話は二百年生きていて、私たちより長生きするでしょう。

1808年にゴドイが失脚し、財産は王室に接収されます。1813年、異端審問所が二枚の《マハ》を押収しました。1815年5月、ゴヤは法廷に呼び出され、この猥褻な絵を誰が注文したのか、その女性たちは誰なのか、何を意図したのかを説明するよう求められます。絵が返されたのは1836年、その後さらに六十五年、サン・フェルナンド王立美術アカデミーの施錠された部屋に置かれました。《裸のマハ》がプラドに入ったのは1901年、美術館の開館から八十二年後です。

そのころ異端審問所は、すでに七十年近く存在していませんでした。

1808年に戻ります。接収と法廷のあいだに、フランス軍がマドリードに入りました。5月2日、市民が蜂起します。その夜から銃殺が始まりました。

この二日をゴヤが描いたのは1814年、フェルナンド7世が戻ったあとでした。注文は公式の記念事業です。できあがったものは式典ではありませんでした。

《1808年5月2日》では、体と武器があらゆる方向でぶつかり、蜂起した人々が騎手を馬から引きずり下ろし、顔がゆがみます。群衆に中心はなく、目はどこにも留まれません。

1808年5月2日 · 1814 · フランシスコ・ゴヤ · プラド美術館



《1808年5月3日、マドリードにて》には角灯があります。地面に置かれ、処刑される者だけを照らし、ほかは照らしません。白い上着の男が両腕を上げています。向かい合うのは兵士の列です。背中、脚、銃、すべての銃身が同じ角度に揃っています。顔は一つも見えません。

ゴヤはどちらの場面も見ていません。それでも私たちは、彼が描いたとおりに記憶しています。

1808年5月3日、マドリードにて · 1814 · フランシスコ・ゴヤ · プラド美術館



彼の最も恐ろしい仕事は、誰のためでもありませんでした。1819年、彼はマドリード郊外に一軒の家を買います。「キンタ・デル・ソルド」、つまり「聾者の家」で、名は前の持ち主に由来します。ゴヤはそのとき、耳が聞こえなくなって十五年たっていました。

彼はそのうち二部屋に、漆喰へ直接、自分のために描きました。何を考えていたのかは分かりません。今使われている題名も、ずっと後になって付けられたものです。

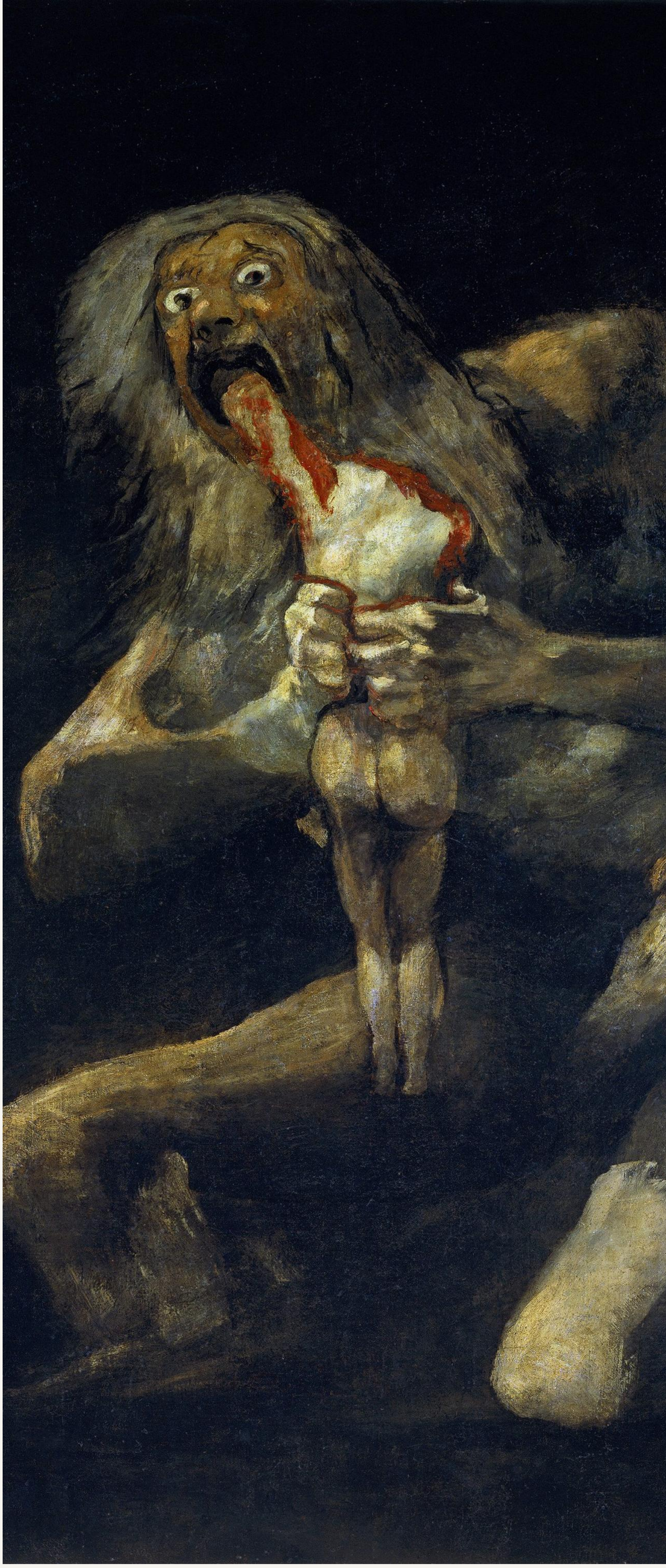
現在《我が子を食らうサトゥルヌス》と呼ばれる絵では、巨人が両手で損なわれた体をつかみ、噛みついています。目玉が闇から突き出ています。指は肉に食い込み、肉がへこむのが見えるほどの力です。

半世紀後、フランスの銀行家エミール・デルランジェ男爵がこの家を買いました。彼は修復家サルバドール・マルティネス・クベルスを雇い、壁の絵をはがして画布に移させます。難しく、危険な作業でした。そのうえで男爵は、その一群を1878年のパリ万国博覧会へ運び、売りに出しました。

誰も買いませんでした。一枚も。

1881年、男爵は売れなかったという理由で、この絵をスペイン国家に寄贈します。ヨーロッパ美術で最もよく知られた画像のいくつかは、そうやって売れ残りとしてプラドに来ました。

しかも、来たときにはもう変わっていました。美術館に掛かっているのは、ゴヤが筆を入れた漆喰ではありません。その漆喰からはがされ、新しい支持体に貼り直された絵具の層です。



我が子を食らうサトゥルヌス · 1819 · フランシスコ・ゴヤ · プラド美術館



犬 · 1819 · フランシスコ・ゴヤ · プラド美術館

《犬》も同じ家から来ました。土か影かの急な帯の上に小さな犬の頭がのぞき、その上は画布の四分の三ほどが空白です。スペイン語の題は「半ば沈んだ」と言っており、ほとんどの人はこの犬が溺れていると考えます。絵はそれを証明していません。犬は埋まっているのかもしれず、挟まれているのかもしれず、隠れているのかもしれず、あるいはただ、私たちに見えない何かを見上げているだけかもしれません。

見るものは確かにありました。まわりの壁には別の絵があり、何を何の隣に置くかはゴヤ自身が決めていたのです。その並びは失われ、犬は一匹だけ残されました。

犬を切り取った家はとうに取り壊されました。犬を受け入れた建物のほうは、ゴヤよりずっと前に始まっていて、しかも美術館として建てられたのではありません。



プラド美術館の創設者としてのブラガンサ王妃マリア・イサベル · 1829 · ベルナルド・ロペス・ピケール · プラド美術館

第五部　美術館になった建物

1786年の建築模型は、両端が張り出し中央に入口をもつ、細長く厳格な建物を示しています。誰が作った模型かは分かりません。設計はフアン・デ・ビリャヌエバ、注文したのはカルロス3世で、用途は自然史陳列館でした。鉱物、標本、押し葉のための建物です。

建物は科学のために立ち上がり、完成間近まで進みます。ところが1808年、フランス軍がマドリードに入り、未完成の広間は兵舎に、地下は武器庫になりました。自然史陳列館は一日も開いていません。

戦後、フェルナンド7世はここに王立絵画館を置くことにします。妃マリア・イサベル・デ・ブラガンサが改装と展示にあたりました。

美術館は1819年11月に開きます。最初の目録に載ったのは311点、そのとき王室収蔵品は千五百点を超えていました。

展示は選択でした。どの絵が収蔵品を代表するか、どう並べるか、来館者が最初に何を見るかを、誰かが決めたのです。千点以上が扉の向こうに残りました。

来館者が得たのは、すべてが一か所にあるという状態でした。何百年も王家の各邸に散っていた絵を、ようやく並べて比べられます。ラファエロと他のイタリア人、初期のベラスケスと宮廷期のベラスケスと晩年のベラスケスを、ひと午後で。祈りのため、儀式のため、あるいは誰かの私室のために描かれた絵が、公共の美術史に入りました。

それ以前の来歴が消えたわけではありません。ただ、以後は作者と流派と時代で並べられるようになった。注文主が一度も考えたことのない区分です。

開館から十年後、ベルナルド・ロペス・ピケルがマリア・イサベルを美術館の創設者として描きます。彼女は図面のかたわらに座り、建物のほうを指し示しています。そのとき彼女は、亡くなって十一年たっていました。

この肖像は、創設の物語に覚えやすい顔を与えました。実際はもう少し込み入っています。権限はフェルナンド7世のものでした。建物はビリャヌエバのもので、絵のために考えられてはいません。収蔵品は三百年かけて集まりました。マリア・イサベルは多くを果たしましたが、プラドを一人で作った人はいません。

美術館は大きくなり、王家のものであったことのない品を受け入れ始めます。国家は修道院を閉じ、修道会を解散させました。建物は用途を変え、祭壇画は分解されます。その断片がマドリードへ運ばれました。



第六部　プラドはいかにスペイン絵画を発明したか

エル・グレコの《聖霊降臨》は、一枚で立つように描かれた絵ではありません。

聖母がほぼ中央に座り、使徒たちほかの人物が上を仰ぎ、その上に小さな炎の舌が降りてきます。手が光へ向かって上がります。引き伸ばされた体が、視線を画面の上辺へ運びます。

この絵は、マドリードのドーニャ・マリア・デ・アラゴン学院の祭壇の一部でした。まわりには同じ注文の別の画布があり、祭壇の構造がその高さと順序を決めていました。ミサのあいだ、信徒は下から、蝋燭の光で、全体を一度に見ていたのです。

十九世紀、閉鎖された修道院の作品はトリニダー美術館に集められます。1872年にトリニダーがプラドへ統合されたとき、グレコの注文のうち五点もいっしょに移りました。

美術館では保存も研究もできます。ただし祭壇は解体され、ミサは終わり、隣の絵は別の順で掛かり、そのすべてが目指していたものは空回りしています。

そして、奇妙なことが起きました。

グレコは存命中、扱いにくい地方の巨匠と見なされ、没後一世紀にはほとんど忘れられていました。プラドで、彼の絵は初めてまとまった数で集まります。教会に一枚、礼拝堂に一枚ではなく、同じ壁に十数枚。人々は彼を全体として見ました。1900年前後にヨーロッパがグレコを再発見し始めたとき、そのために足を運んだ先がここでした。



聖霊降臨 · 1600 · エル・グレコ · プラド美術館

スペイン画派全体にも同じことが起きました。作者ごと、世紀ごとに掛けたことで、プラドはスペイン絵画の歴史を一日で歩けるようにしました。それ以前、その歴史は誰の頭の中にもありませんでした。見られる場所がなかったからです。この歴史に入った作品の多くは、祭壇や修道院や宮殿や私室を失ったあとで入ってきたものです。

プラドはスペイン絵画を守っただけではありません。かなりの程度、発明もしました。一続きの流れとして、一つの画派として、前を歩いて通れる何かとして。



胸に手を置く貴族の肖像 · 1580 · エル・グレコ · プラド美術館

この作業には代償があり、それを最もよく示すのが一枚の肖像です。画布は無傷で、何も起きていない。それでも、そこに描かれた男は別人になりました。

《胸に手を置く貴族の肖像》では、黒い衣から蒼白い顔が浮かび上がります。脇に剣の柄がのぞきます。右手が胸に当てられ、指は変わった形をしていて、中指と薬指が揃えられています。この人物の名は分かっていません。

十九世紀に入ると、人々は彼のうちにスペイン的な名誉、スペイン的な厳しさ、スペイン的な信仰心を見るようになりました。彼は表紙に載り、教室に入り、一つの国民の顔になります。それらはすべて、彼を見た側を説明していて、描かれた当人については何も語っていません。

展示室では、祭壇画の断片が、個人の書斎のために描かれた肖像と同じくらい完結して見えます。展示はすべてを平らにならし、一分後には、どれがどこから来たのかを問わなくなっています。

二十世紀には、すべてが恒久的に落ち着いたように見えました。そこへマドリードに砲弾が落ち始めます。

第七部　絵が美術館を失ったとき

1936年11月5日、プラドの館長部に収蔵品疎開の命令が届きます。

内戦のさなかで、市街は砲撃を受けていました。美術館の職員と美術財産保護委員会の人々が作品を下ろし、状態を記録し、木箱を組み、トラックへ積みました。最終的に二十二の輸送隊、七十一台のトラック、千八百六十八個の木箱になりました。

トルトサのエブロ川に架かる橋で、隊列が止まりました。《ラス・メニーナス》の箱が橋のアーチをくぐれなかったのです。指揮官は当然の案を出します。画布を枠から外して巻け。



ラス・メニーナス · 1656 · ディエゴ・ベラスケス · プラド美術館

修復家マヌエル・アルペ・イ・レタミノは、それをするなら自分の屍を越えてからにしろと答えました。三百年前の絵具は、画布を曲げれば剥がれ落ちる。アルペはそれを知っていました。彼が議論に勝ち、隊列は遠回りして別の渡河点へ向かいます。

その先はバレンシア、次いでバルセロナ、次いでカタルーニャ北部、そして1939年2月、木箱はジュネーヴに着きました。中で運ばれていたのは、ロンドンの処刑を、フェラーラの解体された部屋を、アルカサルの火災を、異端審問所の法廷を、そしてゴヤの家の取り壊しをすでに生き延びた絵です。今度は、自分たちを守るはずの美術館を生き延びる番でした。

戻ったのは1939年9月です。ヨーロッパではちょうどその数週間に新しい戦争が始まっており、木箱は二つの戦争の隙間を通り抜けました。



快楽の園 · 1490 · ヒエロニムス・ボス · プラド美術館

この借り物の家の連なりが最もよく見えるのが《快楽の園》です。

1517年ごろ、この三連画はブリュッセルのナッサウ家の宮殿にあり、イタリアの旅行者アントニオ・デ・ベアティスがそこで実見して書き残しました。1568年、オラニエ公ウィレムの財産が没収されます。1591年、フェリペ2世がこの作品を買い、エル・エスコリアルへ送って手元に置きました。板絵は1933年にプラドへ来て以来ここにありますが、所有はもう一つの機関、国家遺産庁のものです。

この作品は、意図よりも経路のほうがよく分かっています。誰が注文したかは議論があります。全体が何を意味するのかは、誰も知りません。

翼を閉じると、外側には透明な球の中の、青ざめて平らな世界があります。開くと、左に奇妙な楽園、中央には体と果実と鳥と壊れやすい構造物の群れ、右には闇と、人の背丈ほどの楽器と、たいそう勤勉な刑罰の機械があります。

同じ形が板から板へ、裏返って戻ってきます。中央で享受されているものが、右では道具になっています。長く見るほど、整った解釈は残りません。

同時代の人はここに異端の匂いを嗅ぎ取りました。1605年、エル・エスコリアルの図書係だったホセ・デ・シグエンサ修道士が、この画家について今も最良の一文を書いています。ほかの者は人を外から見えるとおりに描く、この者は人を内側にあるとおりに描く度胸をもっていた。

三連画は宮殿を、没収を、修道院を、美術館を通り抜けてきました。そのどれもが、これを説明しきれませんでした。



聖家族 · 1518 · ラファエロ · プラド美術館



ラス・メニーナス · 1656 · ディエゴ・ベラスケス · プラド美術館



我が子を食らうサトゥルヌス · 1819 · フランシスコ・ゴヤ · プラド美術館



裸のマハ · 1800 · フランシスコ・ゴヤ · プラド美術館



犬 · 1819 · フランシスコ・ゴヤ · プラド美術館

これらの絵はどれも、自分の身に起きたことの痕跡を残しています。ラファエロにはスペイン王が与えた渾名が。《ラス・メニーナス》には切り詰められた縁と、ベラスケスの死から七十四年後に他人の手で描き直された頬が。《サトゥルヌス》には、壁だった場所の画布が。《裸のマハ》には施錠された扉の向こうで過ごした一世紀近くが。《犬》には、部屋の残りがあったはずの空白が。展示室の解説札は、どれも教えてくれません。

けれど、もうどこを見ればいいか分かっているはずです。

本書で取り上げる作品

登場順に15点

聖家族
ラファエロ · 1518 · プラド美術館

アンドロス島の酒宴
ティツィアーノ · 1523 · プラド美術館

ブレダの開城
ディエゴ・ベラスケス · 1635 · プラド美術館

王子バルタサール・カルロスの騎馬像
ディエゴ・ベラスケス · 1634 · プラド美術館

ラス・メニーナス
ディエゴ・ベラスケス · 1656 · プラド美術館

カルロス4世の家族
フランシスコ・ゴヤ · 1800 · プラド美術館

裸のマハ
フランシスコ・ゴヤ · 1800 · プラド美術館

1808年5月2日
フランシスコ・ゴヤ · 1814 · プラド美術館

1808年5月3日、マドリードにて
フランシスコ・ゴヤ · 1814 · プラド美術館

我が子を食らうサトゥルヌス
フランシスコ・ゴヤ · 1819 · プラド美術館

犬
フランシスコ・ゴヤ · 1819 · プラド美術館

プラド美術館の創設者としてのブラガンサ王妃マリア・イサベル
ベルナルド・ロペス・ピケール · 1829 · プラド美術館

聖霊降臨
エル・グレコ · 1600 · プラド美術館

胸に手を置く貴族の肖像
エル・グレコ · 1580 · プラド美術館

快楽の園
ヒエロニムス・ボス · 1490 · プラド美術館

言及のみの作品: 着衣のマハ

画家

ディエゴ・ベラスケス
1599–1660

エル・グレコ
1541–1614

フランシスコ・ゴヤ
1746–1828

ヒエロニムス・ボス
1450–1516

フアン・バウティスタ・マイノ
1581–1649

ピーテル・パウル・ルーベンス
1577–1640

ラファエロ
1483–1520

ティツィアーノ
1488–1576

美術館

プラド美術館
マドリード

本書のすべての作品には musescope.app に専用のページがあります。

出典・参考文献

使用文献

プラドとその収蔵品の歴史

プラド美術館。美術館の歴史

プラド美術館。コレクション

プラド美術館。諸王国の間

プラド美術館。プラドの歴史におけるトリニダー美術館

プラド美術館。守られた美術 — 内戦下におけるスペイン美術遺産の救出

王室コレクション、宮廷文化、ベラスケスとゴヤ

Brown, Jonathan. *Kings and Connoisseurs: Collecting Art in Seventeenth-Century Europe*. Yale University Press, 1995.

Brown, Jonathan, and J. H. Elliott. *A Palace for a King: The Buen Retiro and the Court of Philip IV*. 改訂版. Yale University Press, 2003.

Alpers, Svetlana. *The Vexations of Art: Velázquez and Others*. Yale University Press, 2005.

Tomlinson, Janis A. *Goya: A Portrait of the Artist*. Princeton University Press, 2020.

Mena Marqués, Manuela B. *Goya in Times of War*. Museo Nacional del Prado, 2008.

プラド所蔵品データベースより

ラファエロ。《聖家族》、通称《真珠》

ティツィアーノ。《アンドロス島の酒宴》

ディエゴ・ベラスケス。《ラス・メニーナス》

フランシスコ・デ・ゴヤ。《裸のマハ》

フランシスコ・デ・ゴヤ。《サトゥルヌス》

エル・グレコ。《聖霊降臨》

ヒエロニムス・ボス。《快楽の園》

もっと見る

物語は最後のページで終わりません

この本が扱うのは一つの美術館です。MuseScope には数千の美術館の、数万点の作品が同じ語り口で、十の言語で収められています。自宅でも、絵の前でも、読むことも聴くこともできます。

見わたす

数万点の作品に、それぞれのいきさつをやさしい言葉で。

かざす

美術館にいるなら、絵にカメラを向けてください。何を見ているのかが分かります。

備える

出かける前にコースをたどれます。たとえばルーヴルで見るべき二十点。何を探せばよいかが分かります。

どの物語も聴けます。細部が気になったら、そのまま尋ねてください。

シリーズ

本書は「世界の美術館」シリーズの一冊です。ほかの巻は musescope.app/articles に。

スマートフォンで読み取るとアプリが入ります。読むのはパソコンでも、館内を歩くのは無理ですから。

HTTPS://
MUSESCOPE.APP



プラド美術館の創設者としてのブラガンサ王妃マリア・イサベル · 1829 · ベルナルド・ロペス・ピケール · プラド美術館

数ある美術館のひとつ。
残りはアプリの中に。

世界の美術館シリーズ · 2026
MUSESCOPE エディション · MUSESCOPE.APP